

さまざまな分野で個性的な人生を切り拓いてきた人物を迎え、その活動や生き方、考え方を発見するインタビューコーナー。  
今回は開業していた歯科医院を辞め、単身、西アフリカのマリ共和国へ渡り、農村地域の人々を対象に多岐にわたる自立支援活動を続けている村上一枝さんに、活動への経緯、活動内容やその難しさ、成果などについて伺いました。

# 人物探検隊



**CARA** 特定非営利活動法人  
カラ=西アフリカ農村自立協力会

代表 **村上 一枝さん**  
Kazue Murakami

1940年北海道生まれ。日本歯科大学東京校卒業。歯科医師。歯科医院開業後、医院廃業。1989年9月西アフリカマリ共和国へ渡り、ボランティア活動。以後、マリ在住。1992年9月支援団体「マリ共和国保健医療を支援する会」設立。1993年9月「カラ=西アフリカ農村自立協力会」に改名。1993年11月マリ共和国から認証。2001年読売新聞社「医療功労賞」受賞。2002年3月東京都からNPOとして認証。2013年2月毎日新聞社「毎日地球未来賞」受賞。講演依頼、活動内容はCARAホームページ <http://ongcara.org/> 参照。

## 歯科医院を辞めてマリへ

きっかけはサハラ砂漠への旅行だったそうですが、初めて目にされたマリはどうでしたか。

私はサハラ砂漠だけでなく、日本と文化の違う地域に非常に魅かれ、イスラム圏をずいぶん見て歩いていました。旅行するために開業しているって笑われるぐらい。

初めて見たマリは黒いでしょ、広いでしょ、汚いでしょ。自然環境の違いは人々の生活を左右しますからね。衛生状況によって病気を引き起こすことも多いで

しょう。電気も水も学校も病院も無い。あるのは砂・砂・砂、そして熱くて過酷な生活ですよ。「こつこつところにも人が住んでいるんだな」と思ってた。沢山の物と情報に囲まれていながらも、あれこれと不満を言っている日本人での生活を反省し、思考していた1年でした。

昔からボランティア活動等にご興味は？

父も医者で開業しながら民生委員をしていましたし、それを見て育ちましたから、私も何かできないか、という疑問があったんだと思います。自分で支援するためには開業と二本立てでは

きないから、みんなが驚くような値段で患者さんも診療所もつけて若い先生に全部譲って。私にとっては値段じゃない。元気な時にやりたいことをやるのが生きがいだと思っただけ。即決なんですよ。だからインスピレーションって大事にしてます。1989年の8月31日でエイツとばかりに辞めて、後始末をして9月末にマリへ行ったんです。

なぜ活動の場をマリに？

たまたまマリに縁があったということだと思います。観光でマリに行ったんです。伝統的な習慣が有名な世界遺産のドゴン台地の村には観光客が多いんで

## ゼロからのスタート

活動の原点となったのは何ですか。

1軒調査したんです。人口700何人、家族数約40所帯だったかな。事務局長が英語が話せて優秀な人だったから、彼を相棒にしてね。家族の名前、年齢、病気を聞いたり、台所、トイレを見せてもらって国勢調査みたいに調べたの。調べてもらえらる自分たちの悩みを訴えられる、ということ。家長が仕事にも行かず一張羅を着て待っているわけです。自分の年齢もわからない、字も書けない、母子手帳はあっても読めない、でもとにかく政府からもらったものだからビニール袋に入れて大事にしまっているのを見てもうったり。この人は出稼ぎに行ってるの？いつ帰ってくるの？奥さんは何人いるの？何回流産したの？何人産んだの？って、全部統計をとったの。今考えるとよくやっただと思えますね。若かったからできたのね。

他の地域に活動を移しても、この方法でその数カ村を調査します。全体的記録はあります。調査後には結果を集計して、村の長老に集まってもらって、あなたたちの村はこういう状況なんだと説明するんです。彼らにとっても病気で農作業が出来ないとか、死ぬのは非常に不幸なことと思っ

村上、ジャラコロ野菜園で



すよ。でも私たちが引き上げた後はどうなりますか。いまだにエイズ以上にマリリアで亡くなる人が多いんです。マリリアの症状は頭痛、発熱だけじゃないし、多くの人は慢性に移行して最終的に肝臓や腎臓や肺に害を及ぼして亡くなってしまふ。一時的な投薬だけで済ましてしまふんですね。基本的にマリリアにならないような環境を整える知識が無いんですよ。対症療法だけでは根本的な解決にならないから、今のような支援分野に広がったんです。サハラ砂漠での経験が原点なんですよ。

ボランティアを辞めて、首都のバマコに戻ってマリ人のプロジェクトを探したんです。ある組織の人にマリへ来た

まずはどのような活動からスタートを？

幸い、マディナ村ではOXFAMのプロジェクトが始まったばかりで、農業用ダムや牧畜、識字教師育成などの事業が始まり、私も部族語のバンバラ語研修を受けさせられてね。でも医療部門はなかったのですが、村の家庭1軒

ないのね。援助物資としてヨーロッパから、既に彼らが使用した残りの薬が村へ来るんです。消費国の人たちはこのような支援でも「助けてあげてるのよ」という意識もあるってことです。村では「使った残りだ」と批判的ですよ。買えない人にとって無駄ではないけど、支援も失礼に当たるようなことはないじゃないか。どんな国の人でも上から目線はいけません!!

### その国の人、物を活かして

**女性への教育や生活改善なども彼らの自立に影響が大きいのでしょうか。**

村の人は着るものもあまり無いから、女性一人一人に手縫いの衣服作りを教えたいわけ。場所が無かったから道路でゴザ敷いてね。古い布を持ってこさせて子供用の前合



刺繍をする女性

わせた肌着を教えたなら、柔道着だ、カッコイって。そんなことからだんだん女性

を造成し、学童が植林して学校運営に非常に役立つています。苗木の側に野菜の栽培も行いました。造成地内に備えた井戸の水を無駄なく使うためです。家畜が入らないように柵も作る。そうすると水のない村が井戸が欲しいので木を植えるってことになるわけ。木が重要だから植えないと言っても、直ぐに収入に結びつかない植林はプロジェクトとしての発展が非常に遅く、難しいです。でも、成果を確認した他の地域が真似るようになる、所謂裨益効果が出るんです。そして新しいプロジェクトが発展していくと、あまり熱心でなかった村の人たちは「ああこうだったのか」って気が付いたりね。成果が彼らの心を揺さぶって目覚めるのでしょうか。

**スタッフはどんな方たちですか。**

私たちの活動内容では、マリの技術者に有効に働いて貰うことがベストだと思います。アフリカ人への指導はアフリカ人が最適です。現地の材料を使い、現地の技術を活かすことが活性化への早道だと思っんです。日常生活に必要なことから収入を得て生きる道を開くことが大切なんです。学歴では選びません。誠実さが第一で小学校を出ていれば良いです。うちは徹底してそのようにしています。

村の女性の日常工作



と親しくなり、信頼を得ていったんです。女性を巻き込む、特に主婦を味方に付けることは本当に大事ですよ。アフリカでの国際井戸端会議ですよ。

現在の団体になってから採用したマリの女性スタッフが非常に優秀で、私の言うことやアイデア全てが目新しく、強い興味があるらしく、あれもこれも覚えていって言うの。女性適正技術部門「染め物、縫い物、石鹸造り、刺繍等」を彼女が担当するようになって目覚しく発展し、女性が収入を得るようになったんです。お店がないからみんなが買いに来るんです。売れると嬉しいからセッセと作

る。そのお金を貸付資金の原資に蓄えたいんです。これは絶対に他では見られないですよ。10年以上継続しています。女性が村で収入を得るようになり、出稼ぎが減少したんです。夫にも小遣いをあげ、家庭内暴力が減り、女性は経済力が付いて立場が良くなり、自信から自立に繋がって行くんです。

**いろいろな支援・活動がありますね。**

最初は医療だけと思ってこの事業に首を突っ込んだけど、医療を進めるに当たっては教育や食糧、栄養とか色々な知識があるわけですよ。野菜園も基本的なインフラを我々が整備しますが、次からはそこで得た収入で運営させるんです。種を買い、井戸の故障を女性たちの力で修理する。通常は主食のトウジンビエの製粉に臼と杵を使っている、これは7〜8歳の少女期から手伝うので過剰労働になり、流産や死産の原因に

てもやっぱり医療面の普及は難しい。公衆衛生や病気予防を勉強しても直ぐに収入に結びつかないです。助産師や看護師にでもならなければお金にならないわけ。でも子供の下痢やマラリアも多くて親も心配ですし、苦しみたくないうこと、母親が勉強を始めたんです。やはり、知ることがしたいという意識はすくあるわけ。このプロジェクトは村から5人の女性を選び、衛生問題や出産、栄養のことを学んでもらうということにしたんです。親の手で子供の病気を防ごうというわけです。学んだ5人の彼女たち(通称k会)が村に戻って保健普及員として人々に知識を伝達する、という仕組みです。それが2008年から3年間のプロジェクトで大きな成果が出てきたのです。

特に私が感激しているのは、2000年に今の活動地域に入った時には、政府が開設した産院1カ所だけだったのが、「村の女性が字を書けるようになったら産院を建ててあげます」って言ったら



識字学習を勉強する女性

言葉や習慣、意識の違いがあり、日本人スタッフは非常に難しいですね。

### 一番難しいのは医療

**教育や医療は難しいとよくおっしゃっていますが、どのような支援が必要ですか？**

学校で知識を得るとみんな村を出て行ってしまっから教育はいらない、学校もいらないう言っていた村が、識字学習に非常に熱心になってきているんです。すごい意識の目覚めですよ。字を習って名前を書けると嬉しいんですね。それに比べ

なる。妊娠しても定期検査に行ける状況じゃないし、女性の死亡率が一番高いのが出産時というほど非常に事故も多かったんです。そこで過重労働を軽減するために穀物製粉機を女性たちの資金も出させて設置しています。

それから環境保護の問題も重要ですね。日常の燃料に多くの木を伐採しますので、人口が増えるほど伐採量も増えるでしょう。必要だからしょうがないけど、その後植林をしないのが問題ですね。人々の植林の意識を高めたくて学校林



井戸を設置して説明会を行う女性

現在は何んともう7人の助産師が誕生して、7カ村に産院が開設したんです!! すごいでしょ? 単なる産院だけでも他のことも勉強させているから、マラリアになった時にもそこで薬を買えるんです、家族計画の相談も出来て子供の予防接種も確実に出来ています。それが私の自慢なんです。これは女性の将来にも光を当て、女兒の就学率が高まっています。

**産院が医療活動の中心になっているわけですね。**

貧しい暮らしで、知識のなかった人たちに最初から「管理しなさい」と産院を建設しても無理なことなのです。村の開発事業にはステップがあるということですね。年月を経てやっと保健事業に、それも彼ら自身で管理できる保健事業の実施に達したということです。家族計画に見向きもなかった男の人も、現在は奥さんと揃って相談に来るようになってきた。過去には全くゼロだったのが、すごいことです。そして下痢の子供が減ったのは研修を真面目に受けて理解した結果です。食べる前に手を洗うとか、食べ物に蓋をするとか、日本では何でもないことだけども、そういうことも教えていたからです。毎年出稼ぎの若者が帰ってきた時に



うすると「彼らはスペシャリストだからって村の人たちが理解し相談に行くようになってるんです。一人から家族へ、そして村へと我々は忍耐強く意識を変えていく努力をしないと成果は出ませんね。これは意識の問題でもあるから、支援する側のがまんですね。

## 支え、支えられ、 確実な成果へ

活動資金はどついついものですか。私たちにもできる活動はありますか。

我々は一般市民団体ですから、本来は市民からの寄付や会費で

エイズ予防のプロジェクトをしますが、その時にうちのスタッフだけでなく、若いアシスタントスタッフや育成した助産師や看護師に説明させるわけ。そ

事業をするのがベストと思いますけれど、それはなかなか望めないのが民間団体、外務省やJICAの資金をいただいています。でもそれは税金ですから、間接的に皆さんから頂いていることになるんです。成果を出さなければ日本から預かった資金に申し訳が無いと思いますね。日本での仕事は講演などの普及活動です。でも地味で緊急事業じゃないからなかなか取り上げられないんです。どこへでも出かけて事業の話だけでなく、アフリカの女性の話や裏話もね、いくらでも喋りますか



らお声を掛けていただきたいと思います。

**組織を運営していくのに大切なこと、支援活動をしようとしている方たちへアドバイスなどはありますか？**

大切なのは信念を貫くことです。よ。そして誠実に進めると信頼を得るようになります。欲を出さないことも大事ですね。絶対に揺るがない精神力で進むっていうことだと思っんです。現地の人の子になって考えることです。いろんな経験をしなければ、理解できないことが多く、私は48才で始めたんですが、決して遅かったとは思いませんね。若ければいいってことじゃないんです。若い時から支援事業に馴染み、勉強するのはいいですね。私の場合は、今考えるとそれまでの時間は生活の基盤、資金的な基盤をつくる時期だったなと思う。今もいろんな不満・不安がありますけど、だからといって辞める気はないし、結局今まで学んだこと、知ったことをフィードバックして、ゼロで生まれたからゼロで死ぬのが人生だと思っんですよ。

後継者を育てないのが欠点だとよく言われるけど、私はこれは会社組織の事業ではないから永代続けていく必要はないと思うの。誰でも自分の意思で

作り上げた方が納得してできるんですよ。だからいろんな団体がたくさんできればいいと思う。5年計画でも10年計画でもプランを立て、現地の村に許可を得てやりなさい、って言っんです。

**マリへの支援や啓蒙・啓発活動にご多忙な村上さんご自身を支えているものは何ですか。**

支えられている、学んでいる、という感じですね。反省を繰り返して、工夫して、これでもか!!と挫けないで続けていくことでしょうね。私、しつこい人間ですからね。

多種類の項目の事業を同時進行で進めていますと、一隅を照らす光ではないけど、想像していなかった成果が出てくるんです。マリから来る毎月の報告書を訳していると面白いんですよ。苦労というか、心配事やイライラしたり怒ったりもするけど、人々の変わりようが嬉しく楽しいです。でもまだ道半ばです。

**一人でも多くの人にこのCARAのことを知っていただき、それが村上さんの支援活動のバックアップに繋がることを願っています。本日は有難うございました。**